

整備士さんの仕事を
写真で紹介!!

1 東京からの
大型旅客機が到着しました

夢にむかって 挑戦する気持ちを あきらめないで

2 機体やタイヤ、エンジンなどの
外観をすばやくチェック!

3 出発の準備を
進めるスタッフと
情報を交換します

4 機内を見回り
点検結果を書き記します

5 機外では燃料補給や
荷物の搭載が進みます

7 整備の時間は 50 分
出発する旅客機を見送ります

6 つぎの便のお客様が搭乗し
準備は完了です

学校では、地域の行事に参加するなどのボランティア活動にも力を入れています。活動を通して相手に感謝される喜びを実感し、社会で役立つコミュニケーションの力や支え合いのこころを養っています(左の写真は9月に行われた「ふるさとポケット」での一コマ)。
※日本航空専門学校の詳細は学校ホームページ (<http://www.jaa-tech.jp/>) をご覧ください。

飛行機が行き交う千歳の空を見上げ、「私の生まれ育ったまち(山口県防府市)と似ている」と徳本さん。防府は航空自衛隊の基地があるまちです。毎日空を飛ぶ飛行機を見て育ち、年に1度の航空祭には家族で出かけていました。現在は新千歳空港の整備士として、空港に到着した旅客機を点検し、つぎの出発に向けて機長に安全を報告する「ライン整備」を担当しています。到着した旅客機では、点検整備のほか、荷物の搭載や燃料の補給、機内の清掃など、さまざまな方がつぎの出発の準備を進めています。大型の旅客機で50分、小型の旅客機では30分ほどの限られた時間の中で、整備士は、準備を進める方たちと情報を交換しながら、素早く、確実に点検整備を行います。

「旅客機には、同じ機種であっても1機ごとに特徴があります。大きな旅客機には膨大な量の整備記録が残されていますが、担当する便の情報は必ず事前に頭に入れておき、点検の際は入念にチェックをしています」と徳本さん。厳しい視線で旅客機を見つめる仕事の現場は、張り詰めた緊張感に包まれています。

「10年経って1人前」といわれる
整備士の世界。「先輩の整備士は、全体を見わたすと細かな不具合でも自然

株式会社 J A L エンジニアリング
徳本 邦彦 さん
日本航空専門学校航空整備科を平成17年に卒業。成田空港での勤務を経て、今年2月から新千歳空港でライン整備を担当

に目に入る」といいます。

今は先輩とともに2人で整備を担当する徳本さん。当面の目標は独り立ちして、整備を任されることです。技術を磨き、知識を高める日々が続きます。

「飛行機を無事に送り出す整備士の仕事には、絶対に失敗があってはいけません。責任が大きい分、やりがいのある仕事です。空の仕事に夢やあこがれを持つ方は、その気持ちを大切に、あきらめずに挑戦してください。いつの日か同じ夢を持つ方といっしょに仕事をするのがあればうれし

いですね」と温かいまなざしで語ります。

第3章 — to the sky in the future —

未来の空へ描く「夢」

① 空のプロフェッショナルを目指す若者たち

泉沢の臨空地区にある日本航空専門学校。ここには、航空業界で働くことを夢見る若者が全国から集まります。飛行機の点検・整備を学ぶ航空整備科と飛行機の到着・出発に伴う地上支援業務(荷物の搭載や燃料の補給など)を学ぶ空港技術科。将来の空を担う、2人の学生と卒業生で現在新千歳空港で活躍する先輩が、空の道へ進んだきっかけや将来への「夢」を語ります。

大きな機体を前にする仕事にあこがれて

「とにかくからだを動かすことが好き」という小見山さん。小学校のときに見た、整備士が主人公のテレビドラマ。大きな飛行機を相手にするその姿が記憶に残り、いつか自分自身も空港での仕事にあこがれていました。高校3年生のときに参加した学校の見学会でトーイングトラクター(荷物を搭載したコンテナを引っ張る車両)の運転を体験し、空港技術科への進学を決めました。

「現場での仕事に就きたいと思っていたので、実際に空港で使用していた機材をつかう実習の授業は楽しい」と話します。とはいえ、2年間で卒業して社会に出るため身につける技術はたくさんあります。また、航空業界ではたくさんの英語の専門用語が登場します。

「もともと英語が得意ではなかったので苦労しましたが、同じ志を持った仲間と支え合って勉強し、英語で試験が行われるディプロマ(国際航空貨物取扱士)の資格を取得することができました。今では会話の中で自然に英語の専門用語が出てきます。2年前の自分からは想像がつかないですね」と笑います。卒業後は、飛行機への給油などを行う会社に就職する小見山さん。夢の舞台を目前に「1日でも早く現場に出て働きたい」と明るく笑顔で語ります。

小 さなころから飛行機を見ることが好きだったという袴田さん。「父が航空会社に勤めていて、家には飛行機のおもちゃがたくさんあった」と話します。また、中学校のときは特に技術の授業が好きで、機械などがどのように動くのか、その仕組みにとっても興味があったといいます。自然のうちに飛行機が身近なものになり、ものの仕組みに興味がある中で、整備士への夢は早い時期から心の中に芽生えていました。袴田さんは埼玉県の出身です。進学を決め、3年前に千歳へ降りたときの印象を「空がとても広く、自然がいっぱいで、『北海道は大きいな』と実感しました。また、学校のスケールも大きく、校内に滑走路があり、本物の飛行機のエンジンをまわして実習ができる環境に驚きました」とふり返ります。

空が広い、自然いっぱい、 素晴らしい環境での3年間

道がない空を進む飛行機の操縦席にはたくさんの計器が並んでいます。「ひとつひとつの計器に役割があります。それを確実に理解して上手く調整しないと、飛行機のエンジンはまわりません。学んでいるすべてのことは、飛行機が安全に飛ぶことにつながっています。充実した毎日で、あっという間の3年でした」と語ります。来春からは整備士としての就職が決まり、大きな夢をかなえました。「目標は、女性ならではの視点を持った整備士になることです」という袴田さん。新たな夢に向かって、つぎの一步を踏み出します。

はかまだ まゆ
袴田 真由 さん
航空整備科3年生

こみやま しょうご
小見山 翔伍 さん
空港技術科2年生